研究ノート

白人社会に於ける黒人の矛盾

——黒人文学に関連して——

安　部　大　成

I

現代アメリカの黒人作家ジェイムス・ボードウインは彼の文芸評論 *Everybody's Protest Novel* (*Partisan Review*, June 1946) で H. B. ストウの *Uncle Tom's Cabin* (1852) を取り上げ，白人との混血人であるエリザとジョーヂの方に純黒人であるアンクル・トムよりも社会的正義が先に訪れている事を問題にしている。

Uncle Tom's Cabin を一読すれば明らかになるが，エリザとジョーヂは人間的自覚に富んだ奴隷で，奴隷制下の非人間的生活状況に甘んずることが出来ず，奴隷農場を脱出する。そして，幸いにも奴隷解放主義者，キリスト者等の白人協力者の積極的な助力を得ることによって，自由の地カナダに到達するが，アンクル・トムは自由の地が所在する北方に背を向け，ケンタッキーより最南部へと奴隷商人の手を経ながら売却の旅を重ね，遂にはレグリー奴隷農場で殴殺の憂目に会う。

白人女流作家H・B・ストウはエリザの美しさと魅力を頭髪，瞳，指，脚胴のくびれに至るまで描写し，ジョーヂの容姿はスペインの美男子の様に描いているに反して，アンクル・トムは真黒な典型的アフリカ原住民の身体特徴の所持者として描いている。

白色人種に近い身体特徴を持ち，白人世界の審美的規準に敵う肌の色の淡い奴隷が自由と平等を獲得し，アフリカ土人的身体特徴を有する奴隷は天国に於ける自由と平等を祈念するのみで，地上では社会的不正の対象であることに，ただ忍従する外に生き様がなかったという黒人作家の指弾を浴びる約百年昔の物語は組織的黒人差別を社会生活の一環とするアメリカ社会に伸吟するアメリカ黒人の悲劇の一面を想起させるものである。

アメリカ黒人が奴隷制度廃止後，百余年になる今日に至っても，未だアメリカ社会に融合されないでいるのは黒色人種に加えられる偏見と差別によるものであるが，黒人は三世紀を越える歴史をアメリカに有し，この間，奴隷制や組織的差別行為の幣害を蒙り，社会的，経済的，地域的に白人社会より除去され分離されて来たが文化的には白人社会に融合されて来た。白人社会から社会的，経済的に除外される度合は黒人内部の三階層，上・中階層，下階層，貧民層によって可成り異なるが，彼等の心理，精神面で共通するのは，偏見，差別，隔離によって白人社会から組織的に排除され，社会的に分離されながらも白人社会の所有する力，美，社会的地位，保障された生活等に衝動的といえるほど魅きつけられていることである。[1]

白人社会は黒人に対して就職差別，住居差別，教育行政の差別等を遂行する一方，白人社会の社会的価値基準に匹敵する生活，能力の発揮，建設的業績の達成を要求する。[2]これは白人側から黒人に課せられた経済的色彩の強い矛盾した要求であるが，この至難の課題に屈することなく，不利な社会的諸条件の下に勤勉に労働し，教育を受け，特殊技能を身につけ，白人と完く変らぬ有能な人間であることを充分に証明しながら，自らの社会的，経済的地位を改善したのが黒人上・中階層である。

文化的に白人社会に同化された黒人が黒人側に生ずる矛盾に最も明白な形で当面するのは彼等が経済的地位を白人上・中階層のそれとほぼ同等なレヴェルに到達させた時であって，それは精神的要素の強い矛盾であるが，これは先ずこの黒人上・中階層によって体験される。彼等は白人社会の経済的地

位,社会的価値を満足させ得る上・中階層人へと自らを改善したにも拘らず,彼等の人種的差異に対する差別の壁に行き当り，白人社会への全面的参加を拒絶され，この社会の一隅に黒人共同体 (Negro Community) を形成して孤立しなければならない。彼等の精神的矛盾は白人社会の拒絶によって生ずるが，それが緊張した矛盾となるのは白人社会に拒絶されているにも拘らず，この白人社会に融合されんことを希望することにある。彼等は白人社会の拒絶の原因を社会的・経済的に最も不利な条件に置かれている下層，貧民層黒人の無知と貧困及びその社会的不適切性に転化させ[3]，彼等を嫌悪し，白人に対しては彼等を巧妙に利用し，あざむくという「要領のゝ黒奴[4]」(smart nigger) 的行動を取って白人社会への嫉視と敵意を秘かに表明する。E・F・フレィザーはこの上・中階層黒人（彼はこれをブラック・ブルジョワジーと呼んでいるが）の下層，貧民層黒人に対する嫌悪は自らが黒人であることへの自己嫌悪と黒人でありたくないという願いを表わすものであり，また社会的・経済的地位を改善しながらも白人社会に受け入れられないという気の毒な立場 (sorry role) から生ずる,と説明しているが[5],白人社会からは勿論,黒人上・中階層社会からも閉め出され，最も過酷な経済差別と住宅差別の幣害に見舞われ，白人社会の矛盾した要求に応ずる術のない約70％の黒人人口を占める下層，貧民層黒人の場合はどうであろうか。彼等は白人社会と黒人上・中階層への敵意と自己嫌悪，白人羨望の復雑な感情に痛めつけられ，その貧困と劣悪な生活条件の下に,アルコール常飲,麻薬常用，性的快楽といった種類の反社会的逃避主義に落ち入るか，食物，住み家等の目前にある実際的生存価値を持つものにのみ心を奪われることによって,生産的,向上的意欲を消失し，或は心霊主義の様な現実逃避主義に救済を求め，白人社会の課する矛盾した不当な要求と，自らの精神的感情的矛盾の犠牲者となる[6]。もっとも現実逃避主義的行動は上・中階層の間にも見られ，博打，競馬，ポーカー熱がそれで，これは黒人の文化的伝統である黒人霊歌的宗教文化を拒否しながら，独自の思想を持つに至っていないブラック・ブルジョワジーが見い出した浅

薄な宗教，機会獲得の神（God of chance）の意味を持つ[7]といわれる。

こうした自らの創造的，生産的エネルギーを痳痺させ，人間性を腐食させる自己嫌悪，自己恥辱，現実逃避主義的行動を生む黒人の精神的矛盾の面はアメリカ黒人問題を考える上で見逃すことの出来ぬものである。

アンクル・トムに自由も社会的平等も訪れなかったのは彼がエリザやジョーヂの如く，肌の色が白人に近くなかったためであり，彼が現実の苦痛をただ忍従する外なかったのも彼の肌の色の黒さの故であったが，彼の肌の色に課された不正行為は白人側からのものであり，アンクル・トムは無抵抗にこれを甘受し，自己嫌悪することなく，白人を羨望することもなく，ただ忍従したにすぎぬ。たが，今日のアメリカ黒人が自らの肌の色を嫌悪し，恥辱と感じさらには，白人の白さを羨望することによって断え間なく苦悩し，この心理的混乱と重圧に忍え難く心傷の救済を要するのは白人側から加えられた不正行為の直接の所産とするよりも黒人自らが生んだ精神的矛盾の所産と見なすべきであろう。

少数者グループである黒人が社会，経済，政治のあらゆる面で優越する白人世界に生活し，この優越する人種グループの抑圧を受けることによって両グループの間には当然敵対関係が存在する。この敵対関係が黒人側に極めて不利であるのは経済力，政治力，権力が白人側に所有されているという客観条件の外に黒人が白人の文化に所有されているためである。敵対関係にある白人の文化に所有されることによって，彼等黒人の心理，精神面で相矛盾する要素が抗争するからである。この精神面での悲劇は彼等の彼等を虐げる白人への人種的憧憬であり，これは黒人の自己嫌悪と自己恥辱の感情を病的に発酵させ，彼等の人間性を腐食させる精神的病源になっている。アメリカは多種多様な人種，民族を同化，隔合させて出来上った国であるが，三世紀半の歴史をアメリカに有する黒人が今日まで最も同化されにくい少数民族グループとして取り残されて来たのは，アメリカの人種同化に関するエトスと称されるもと完く異質の人種グループであるためといわれる。

注 (1) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism* (New York: Dell Publishing Co., Inc., 1962) p. 23　エシエンーウドムはこれをアメリカ黒人の矛盾であるとし，この精神的矛盾より黒人を解放しようとするのが黒いナショナリズムであると見ている。

(2) これがアメリカ社会に於ける黒人の矛盾である，とマルチン・ルーサー・キングは主張する。猿谷要訳「黒人の進む道」サイマル出版会 129頁。

(3) Essien-Udom, op. cit., p. 16.

(4) 黒人は支配者グループの白人社会に被支配者グループとして暮す上で，その不利な社会条件の下に白人と適当に対処する様々な型の行動様式を発展させた。「要領のいい黒奴」the "smart nigger,"— このタイプの黒人は白人と接する際にその関係を巧妙に保ち，彼及び黒人の側が利益を上げる様な仕方で立ち廻り，しかも，それを相手の白人に気づかせない。—サミュエル・M・ストロングはこの他8種類の黒人社会タイプを取り上げている。Samuel M. Strong, "Negro-white Relations as Reflected in Social Types," *American Journal of Sociology*' 52 (1946), pp. 23—30.

(5) E. F. Frazier, *Black Bourgeoisie* (New York: Collier Books 1962) pp. 186—188.

(6) *Black Nationalism*, Chapter I, The Negro Dilemma 参照。

(7) Frazier, op. cit., pp. 172—175.

II

アメリカの人種同化に携わるアメリカのエトスはその根を「英語を話す白人のプロテスタンティズム」(English-Speaking white Protestantism) に持つといわれる。[1]

この人種同化の規準はW・L・ワーナーとL・スロレのヤンキーシティ市の共同研究により人種同化のそれとして抽出されたものである。「英語を話す白人のプロテスタンティズム」はアメリカの人種同化上の母体とされる白人の所謂「旧移民」(old immigrant で，1880年以前にアメリカに入国した北ヨーロッパ出身の民族グループ）の人種的特徴（白人）と文化的特性（英語，プロテスタンティズム）を表わしたもので，これに近い人種，民族グル

ープがそれだけ容易にアメリカに同化することが，一応明らかにされた。彼等の取り上げた五つの人種タイプと六つの文化的特性を掲げると次の如くである。[3]

人種タイプ

1　肌の色の白い白色人種。

2　肌の色の浅黒い白色人種。

3　黄色人種と白色人種の混血人で白色人種の身体的特徴が優勢に現われた者。

4　黄色人種及び白色人種と黄色人種の混血人で黄色人種の身体的特徴が優勢に現われた者。

5　黒色人種及び黒色人種との混血人。

文化タイプ

1　英語を話すプロテスタント。

2　英語を話さないプロテスタント。

3　英語を話すカトリックと非プロテスタント。

4　インド・ヨーロッパ語を話すカトリックと非プロテスタント。

5　英語を話す非キリスト教徒。

6　英語を話さない非キリスト教徒。

これらの5つの人種タイプの各々に六つの文化タイプを加えて第1位から第30位まで人種同化の序列が形成される。この序列を見ると白色人種と黒色人種との間に同化上，極めて大きな距離があるが参考上，上位と下位の人種文化グループを取り上げて見よう。

1　英語を話す肌の色の白い白色人種のプロテスタント。

2　英語を話さない肌の色の白い白色人種のプロテスタント。

3　英語を話す肌の色の白い白色人種のカトリックと非プロテスタント。

4　インド・ヨーロッパ語を話す肌の色の白い白色人種のカトリックと非プロテンタント。

5　英語を話す肌の色の白い白色人種の非キリスト教徒。

6　英語を話さない肌の色の白い白色人種の非キリスト教徒。
……
25　英語を話す黒人色人種及びこの人種との混血人のプロテスタント。
26　英語を話さない黒色人種及びこの人種との混血人のプロテスタント。
27　英語を話す黒人種及びこの人種との混血人のカトリックと非プロテスタント。
28　インド・ヨーロッパ語を話す黒色人種及びこの人種との混血人のカトリックと非プロテスタント。
29　英語を話す黒色人種とこの人種との混血人の非キリスト教徒。
30　英語を話さない黒色人種とこの人種との混血人の非キリスト教徒。

この人種同化の適，不適切を序列的に明示する尺度の第6位と第25位の文化タイプに注目して見よう。

第6位の文化タイプは「英語を話さない非キリスト教」であって，言語と宗教で現わされたアメリカ文化の母体の二つの特性「英語を話すプロテスタンティズム」から最も離れた，最も異質なものである。これに対して第25位のそれはまさに「英語を話すプロテスタンティズム」という文化の母体そのものである。これが第25位にあり，アメリカの人種同化の母体から極て異質なものであるのはこの文化の担い手が黒人であるためである。

言語は修得可能なものであり，政教分離と信教の自由が保障されるアメリカではこの二つの文化的特性は同化上の階段を形成するが障壁とはならない。障壁が生ずるのはこの文化の担い手が白人か黒人かという人種の差異によるのである。白人である場合，カトリックであるか，プロテスタントであるかはアメリカ生活の主流に融合する上で問題となるが，黒人である場合，こうした文化的特性は完く機能を発揮しない。ワーナーとスロレの分類した6つの文化タイプはこの意味で白人に該当する尺度でるが黒人には殆んど無用なのである。アメリカでは黒人はその人種的特質によって文化的特性を斟酌する必要のない異質分子なのでる。

1962年に黒人評論家L・E・ローマックスは黒人の歴史をふり返って次の如く述べた。

「我々は我々の肌の色を変えることは出来ないので『文化的白さ』(cul-

tural whiteness）と呼ばれるべきものを獲得する方向へと我々の努力を傾けて来た，……白人社会の生活様式と価値体系を身につけることは白人によって享受されている諸権利と自由にあずかる上で我々に効力を発揮するであろうという，今では明らかに悪運にみちていた希望の下に，我々はこの文化的白さを追い求めたのであった。[(4)]」

文化的白さが白人の生活様式，価値体系を意味するのならば，これは白人社会の経済的社会的地位，言語，宗教は勿論，白人社会の民主々義理念をも包含している。黒人はこれらの白人文化に同化し，或るグループは上・中階層を形成して地位を向上させ，白人の生活様式を獲得した。だが，そうすることによって希望して来た事，白人社会への融合が達成不可能の事であったという事実はこの人種同化の尺度に於ける人種タイプの序列が黒人に対しては強固な社会的障壁であることを明白にしている。

人種の相違が社会的障壁となるのは人種の相違に扁見が加えられ，差別をもたらすためであって，人種の相違そのものが人種差別をもうらすものではない。従って，文化的白さの追求とこれから述べんとする人種的白さの追求とは根本的に区別がなされねばならない。

文化的白さの追求は黒人が白人の文化と生活様式を所有し，人間共同の価値に依存することによって人種の相違に加えられる偏見と差別が消解するであろうという希望に基づく行為である。これが極めて受身の態勢にある消極的行動であり，希望の達成されない行動であったという自覚が1950年代中盤に始まるキングやＳＮＣＣを中心とする積極的な差別撤廃運動の契機となったとローマックスは云う。だが，白人文化に同化されること，文化的白さを追求することは，同時に白人文化に内在する人種同化の規準，白人の審美的規準，人種偏見にも感化され，同化されることによって，黒人が黒人であることを否定的に評価し，感受するという矛盾に陥る危険を含んでいる。この矛盾を端的に現わしたのが黒人の人種的白さの追求という不可能事への願望に基づく行動である。

この人種的白さを求める行動を考えるに当って，アメリカ黒人の約70％は白人と混血している[5]ことを念頭に置かねばならない。これら混血黒人の中で白人の身体特徴を極めて優勢に遺伝した黒人は白人と殆んど変らぬ程，色が白く，白人として通可する。これは passing と呼ばれ，本人が巧みに黒人の血を有することを隠し，白人社会の生活様式に適応すれば白人として社会的にも通可する黒人である。但し，自らの遺伝的事実が露見することを恐れる心理的負担と白人社会に融合されながらも彼等の所持する黒人意識は彼等を社会的に局外者（marginal man）にさせる傾向にある。[6]

黒人が混血人であるにはムラトーの如く，必ずしも白人と黒人の間に混血が行われるわけではなく，混血黒人と混血黒人，又は黒人と混血黒人の間に生ずるものも何らかの割合で白人の血を有することになるので混血黒人である。こうした混血の仕方が持続して来ているので，今日のアメリカには純粋のアフリカ人種である黒人は非常に少ない，と推測されている。

この様な混血黒人であるアメリカ黒人には非常に白人に似た身体特徴を持つ者からアフリカ原住民的身体特徴を持つ者まで，肌の色，体毛，顔面構造身体つき，眼の色等を含めて多種多様なタイプが存在する。

人種的白さを求める行為には，初ず黒人間に存在する肌の色の序列が挙げられる。これは「黒人間の肌の色差別」[7]とも称されるが，この肌の色の序列を形成せしめるのは黒人間に存在する身体特徴の多様性とこれを差異的に価値づける白人文化の反映によるものである。

肌の色の序列は一般に四段階に分けられる。1.小麦色（fair），2．黄褐色（Light），3．茶色（brown），4．黒色（black）がそれである。これらの色の内，小麦色と黄褐色は黒人上，中階層の肌の色と合致するが，必ずしも黒人の階層を反映するものではない。

この四つの肌の色の内，小麦色が最も高い社会価値と美的価値を有し，順次価値は低下して黒色が最も低い。この様に肌の色の序列は色の社会的階段を形造り，肌の色の淡い黒人，即ち白人に近い黒人は肌の色の濃い黒人，即

ち，黒人的である者よりも美しく，魅力があり，価値のある人間とされる。

肌の色の淡い黒人が黒人内部で高い社会価値と美的価値を与えられるのは主として次の三つの社会的要因が考えられる。

1．小麦色，黄褐色はムラトーの特徴であって，このムラトー・グループは奴隷制時代に他の非混血奴隷と異った地位を与えられていた。つまり，白人奴隷主と黒人奴隷女の間に生れた混血奴隷は家事手伝人，職人奴隷として使用されることが多く，非混血奴隷が農場奴隷として重労働を課せられたに反し，有利な労働条件を与えられ，また白人奴隷主の近辺で生活することにより白人の生活様式と文化を身につける機会を得ていたのみか，自由黒人として，奴隷の身分より解放される機会も多かった。このムラトーの過去の特典が肌の色と深い結びつきを持っている。[8]

2．黒人は白人文化の担い手である。従って，白人社会の人種的特徴に対する評価，審美的規準をも共有する。肌の色の淡い黒人は真黒な黒人よりも白人に近く，これら白人社会の価値，規準にそれだけ適応性がある。

3．黒色人種を奴隷とし，また組織的差別の対象として迫害した社会では肌の色に偏見が付着し，肌の色の黒さは社会的弊害と社会的不適切さの色と感受される。

この肌の色の社会的階段はその頂点を肌の色の淡い，白人に僅かでも近い黒人に置いているが，これは黒人の白人でありたいという願望の限界がここに置かれるのでは勿論ない。それはこの肌の色の社会的階段は肌の色の社会的梯子の階段（ステップ）であることに注目すれば明白である。黒人はこの肌の色の社会的梯子を白人社会にかけているので，これは同時に白人にまで到達したいと願う黒人の心理的梯子でもある。小麦色の肌の上には，さらに肌の色の淡い黒人が居り，passing が居り，これらを通って遙か彼方の白人に至る肌の色の階段は黒人が黒人でありたくないという願望と白人と深い関係を持ちたい，或は白人でありたいという願望の表明であろう。

この肌の色の階段を登る行為が実際的に行われるのは黒人が異性と親密な

関係を持つ場合，或は結婚相手を求め，選ぶ場合に，肌の色の淡い相手を対象にするという強い傾向[9]に見られる。

また，黒人化粧品産業を成功させた程，黒人間に拡った皮膚漂白クリーム（skin bleaches）や直毛剤（hair straighteners）の使用もこの行為を示すものでE・チノイはこれを肌の色の社会的階段の「偽装的登段行為[10]」(pretension of social climbing）と呼んでいる。

これらの行為は黒人内部に於ける人種的白さを求める行動であるが，その対象が肌の色の淡い黒人であるのは表面に表わされた行為に於てであって，実際にはその対象が白人そのものであることは隠された行為に注目すると明らかになる。

人間関係に於ける親密感，違和感を計る尺度として「社会的距離」(social distance scale）が使用されるが，アメリカ市民間の様々な人種，民族グループのそれをE・S・ボーガダスはこの尺度を使って検討したが[11]，それによると黒人がアメリカ市民の中では最も親密感の持たれていないグループである。この尺度は

① 結婚による親族関係を持つ。

② 親友として自分の属するクラブに参加してもらう。

③ 隣人として自分の町内に住んでもらう。

④ 自分と同じ職場にいてもらう。

⑤ 自分の国の市民になってもらう。

⑥ 自分の国の単なる訪問者であってもらう。

⑦ 自分の国から出来れば追放したい。

というもので，黒人が1から最も離れ，7に近い点に置かれることは白人より最も社会的に距離が大きい存在であることを示している。

これは黒人が人種的白さを求め，白人と人種的に近い距離を持たんとする場合，白人への接近を殆んど絶望的なものとしている。

黒人が人種的白さを求める行為をとりつつ白人との最も親密な関係，①の

白人との結婚を望んでいるかを考える上で，ガンナー・マイヤデルがその黒人問題研究の書 American Dilemma で試みた黒人の欲求順位表に対する黒人社会学者C・C・ハーントンの反論は大いに参考になる。

この黒人の欲求の順位表というのは

1．生活保障。
2．法廷での公正なる取り扱い。
3．選挙権の獲得。
4．公共施設，バス，教会における差別撤廃。
5．社会的平等とエチケット。
6．白人との結婚と性的交渉。

であって，ハーントンは黒人は与えられた六つの項目を最も欲するものの順番に列べるに当って白人の期待にそう回答を行い，本心を隠している[13]と主張し，黒人との多くのインターヴューに基づき，この順位は完く逆であり，黒人が最も欲しているのは⑥の，白人との結婚と性的交渉であることを，その書 Sex and Racism in America を通して明らかにした。ハーントンは黒人が白人に性的衝動を感ずるのは社会的衝動によるもので，人種偏見と差別の社会的障害を一挙に乗り越えようとする衝動であると見ている。これは黒人が白人文化に同化され，白人の美的価値，社会価値に依存しているので同族の黒人異性よりも他人種の白人異性に一層魅惑され，性的魅力，欲望を実感するという文化的同化（cultural assimilation）の見解を踏まえて，この白人への欲望を遮断する社会的要因，人種差別が黒人の心理に及ぼす影響に注目したものである。彼はこの書で白人との結婚と性的交渉という黒人の隠された願望を明るみに出した。そして，この隠された，ダイナミックな願望が黒人の人間性を不具化するまでに強力なものであるのはアメリカ社会の組織的人種差別の所産であると断じているが，これは白人社会の所有する社会的弊害にのみ眼を向ける欠陥をもっている。これはジェイムス・ボールドウィンの指弾，白人女流作家H・B・ストウの *Uncle Tom's Cabin* に登場する

黒人奴隷の人種的性格づけへの批判が白人社会にのみ向けられるのと同じ欠陥を示している。何故ならアメリカ黒人は人種的白さを求めることによって，つまり，アンクル・トム的身体特徴を拒絶し，エリザ，ジョーヂ的身体特徴を求めることによって，白人社会の自由と平等に到達せんとする強い傾向を持っているからである。

偏見と差別の障害も含めて，社会的距離の最も大きい白人，人種的に敵対関係，支配者—被支配者の関係にある白人に黒人が文化的同化の作用により，心理的に密着することによって人種的白さを追求することは黒人を白人の精神的，感情的奴隷の状態に置くものであり，白人との人間的，社会的平等を獲得する上で黒人に致命的な精神的矛盾を生じせしめるものであることを見逃してはならない。

これはアメリカ社会，文化という全的統一体との関係上検討されねばならない黒人の個的存在性「アメリカ黒人とは何か」を明確にする上で解決すべき致命的課題である。

註 (1) George Simpson, *Man in Society* (New York: Random House, 1954) p. 68.

(2) W. L. Warner and Leo Srole, *The Social Systems of American Ethnic Groups* (New Heaven: Yale University Press, 1945)

(3) これは James W. Vander Zanden の *American Minority Relations*, (New York: the Ronald Press Company, 1963) p. 276に引用されたものを使用した。

(4) L. E. Lomax, *The Negro Revolt* (New York: Signet Books 1963) p. 20.

(5) アーノルド・ローズは M. T. Herskovits が *The Anthropmetry of the American Negro* (New York: Columbia Univertity Press, 1930) に発表している混血黒人の調査結果はその方法に多少問題があるが，ほぼ妥当なものであろうとこれを認めている。Herskovits は 1.551名の黒人をサンプルにとり，白人祖先を持つ者を調査した。この結果，71.7%が白人と何らかの割合で混血していることを見い出した。Arnold Rose, The Negro in America (New York: Harper Torchbooks, 1964) pp. 45—47.

(6) T. M. Newcomb, *Social Psychology* (New York: the Dryden Press, 1954) p. 540.

(7) Zanden, op. cit., p. 377.

(8) 1860年には約450万人の黒人のうち60万人はムラトーであった。これからは白人の男と黒人の女の性交渉の結果，産出されたものである。これは白人の男の権力と能力に黒人の女が自主的に屈服して関係を持っに至ったものであったが，これによって，黒人の女達は農場に於ける重労働をまぬがれたり，食事や衣服の改善を得ることも多く，又，出産する混血児が純黒人よりも特典を受けることを期待し得た。南北戦争以前，多くのムラトーが自由黒人人口を形成し，1850年，ムラトー，或は混血黒人は自由黒人の37%を占めたが，奴隷人口の僅か8%を占めるにすぎなかった。E. F. Frazier, op. cit., pp. 18—19, pp. 116—117.

(9) St. Clair Drake and H. R. Cayton, *Black Metropolis* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1945) 参照。

(10) Ely Chinoy, *Sociogical Perspective* (New York: Random House, 1954) p. 5.

(11) Emory S. Bogardus, *Immigration and Race Attitudes* (Boston: D. C. Heath & Co., 1928) 参照。

(12) C. C. Hernton, *Sex and Racism in America* (New York: Doubleday & Co, Inc., 1965) 横山一雄訳「傷だらけの黒人」芸文社，9頁〜10頁，彼の社会学上の立場は第六章「アメリカに於けるセックスと人種差別の社会学と将来の問題」を参照。

III

ハーントンは社会学の分野で黒人が最も親密な関係，肉体的融合（biological amalgamation）を白人に求めていることを明らかにした。彼はこの黒人の白人に対する欲求は黒人と白人との自由な人間関係を妨げている社会的経済的差別が除去されると人種差別に由来する社会的衝動という，ゆがめられた性質を消滅させ，自然な人間的欲求になるであろうと推測している。

これはリチャード・ライトが文学の分野で展望した黒人文学のアメリカ文学への消解と同一の見解に立つものである。ライトは黒人詩人J・M・ホートン（1797—1883）に始まる黒人文学の悲劇的性格は黒人作家がアメリカ文化に同化されながら，人種的差異によって生ずる絶望的な隔絶感を内包することによって形成されたと見ている。この「自分が実際に体験できないものを信じ，感じていた二元分裂の男[1]」ホートンが詩に表現した願い，悶え，苦

しみは彼が生きていた時代の血なまぐさい奴隷制度下の社会的状況を反映するものである，とライトは論じ，この黒人文学の二元分裂的性格をさらに深めたP・R・ダンバー（1872—1906）の二重傾向も彼の置かれた白人社会での制約に帰している。ダンバーは白人の抑圧と黒人の苦痛を歌うに際し，白人の意識に依存し，黒人の真実を隠してこれを詩に表現したが，ライトはこの黒人文学の二元分裂性の社会的状況の面に注目して，第二次大戦後までの黒人文学を検討し，アメリカ社会の人種的偏見と差別が撤廃され「ニグロ人がアメリカ生活の主流に融合するとき，そう呼ばれてきたようないわゆるニグロ文学そのものは現実的には消滅することになりましよう。[2]」と展望している。

しかし，ハーントンの見解をも含めて，黒人への偏見と差別が撤廃され，アメリカ黒人がアメリカ生活の主流に融合されるまで，アメリカ黒人はその精神的矛盾から，黒人文学は所謂ニグロ文学といわれるその二元分裂性から，解き放たれることはないのであろうか。また，黒人への偏見と差別が消滅することは黒人の白人文化への精神的隷属性を消滅させるであろうか。

黒人の精神的矛盾と黒人文学の二元分裂性の問題は白人社会の偏見と差別という社会的要因と共に，黒人の白人文化への同化の面で検討されねばなるまい。

この文化的同化の面での精神的矛盾より黒人を解放せんとする運動が第二次大戦頃より北部諸大都市の黒人ゲトーに抬頭し，1960年前後にアメリカ社会にその姿を現わした。[3]ブラック・モズリムがそれである。反白人，反キリスト教，黒人至上主義的人種分離を主唱するこの運動はマルコムXをスポークスマンとして持ったが，黒人運動の穏健派や白人社会が危険視する白人憎悪の集団[4]としてのみ見ることは出来ない。

素朴な「ヤコブの歴史[5]」を中枢とし，選民思想に立脚するこの運動は黒人ゲトーの大衆に対してのみでなく，黒人知識人にも影響力を及ぼしている。エシエン—ウドムはこの運動をアメリカ黒人独自のエトスを確立せんとする

運動として把握している[6]。これをアメリカの人種同化の規準に倣って表わすと「アラビヤ語を話す黒人のモズレミズム」ということになろう。

ブラック・モズリムは統制のとれた組織力を持ち，独自の学校，テンプル自衛団，商店を有し，白色人種とあらゆる面で分離しようとする運動を展開しているが，重要な意義はこの実際的人種分離よりも，この運動がもたらす黒人の白人よりの精神的分離にある。これは黒人の白人文化への精神的隷属を断ち切る契機となるもので，1960代の中頃より黒人間に高まって来た「黒い意識」「黒い力」「黒色は美しい」という黒人意識はこのブラック・モズリムの強力な影響下に誕生したものである。ブラック・パワーの詩人，リロイ・ジョーンズは1967年夏のネワーク黒人暴動に参加しているが，1963年に出版した *Blues People* の初めに「この世で初めてあった黒人である私の父母にこの書をささぐ」と書いているが，ブラック・モズリムを中枢とする新しい黒いナショナリズムの運動は黒人の白人よりの精神的，感情的独立の運動と見ることができ，この運動に照して，アメリカの黒人文学もまた検討されるべきであろう。

注 (1) Richard Wright, *The Literature of the Negro in the United States* 古川博己訳「アメリカのニグロ文学」早川書房，黒人文学全集第十一巻，ニグロ・エッセイ集，157頁。

(2) 同書　191頁。

(3) ブラック・モズリムは元来，「イスラムの国」と呼ばれ，1930年頃，W. D. Fard によってデトロイトで始められた黒人運動である。1934年，現教祖であり，予言者とされるエリジャ・モハメッドに受け継がれた。1960年には約10万人の団員を容し27州に約69のテンプルを持つこの黒い回教徒団の存在が全米に知られたのは1959年七月，マイク・ワァラスが「憎悪が生んだ憎悪」という題でこの集団をTVドキュメントで紹介した時で，これを契機に *Time, The Readers Digest, Cosmopolitan, U. S. News and World Report, the New York Times,* 等が取りあげることになった。U. E. Essien-Udom, *Black Nationalism* p. 85.

(4) マルチン・ルーサー・キングはこの運動を黒人優越主義運動として批難し，NAACP のサーグッド・マーシャルは「黒人であれ，白人であれ，政治団体であれ，宗教団体であれ，憎悪を説く集団は危険であり NAACP はこれに反対であ

る」と述べている。U. E. Esslen-Udom, *Black Nationalism* p.86 *The Saturday Evening Post* 誌（1963年1月26日号）は Alfred Balk と Alex Haley の Black Merchants of Hate を掲載している。この論説はブラック・モズリムは白人社会の黒人差別とこれを撤廃しようとする NAACP や Urban Leage 等の正当な要求に応じない白人社会への黒人の憎悪が生んだ集団であると主張している。

(5) 「ヤコブの歴史」今日でもアフリカには自らを月の人と呼ぶ種族が居るが，黒人は元来，月に住んでいた。月と地球は同じ一個の惑星であったが，今から約66,000,000,000,000年前，月に住んでいた黒人科学者が非常な不満を持っていてその知識を利用して月を破壊した。月は爆発によって元の軌道より12,000マイルその片端の地球は36,000マイル離れてしまった。月は生命を失い，地球のみに生命が残ったが，この月を爆発した科学者の名は未だに不明である。地球が月から分離した時，地上には黒人だけが住み，メッカを首都としていた。この黒人の中に24名の賢明な科学者がいたが，その中の一人が他の学者と仲違いし，特に強力な黒人族，シャバズ族を作り出した。アメリカ黒人はその子孫である。

今から56,800年前70%の人々が満足し，30%の人々が不満足であった時，「ヤコブ氏」が誕生した。彼は騒動を起し，平和を破り，人々を殺すために生れて来た男であった。彼は「頭でっかちの科学者」として知られ，人種交配の専門家であった。彼はメッカの街角で説法を始め，59,999名の信者を得て，ヨハネが天啓を受けたと新訳聖書にあるポトモス島へ移った。ヤコブ氏は黒人であるのにアラーの神に憤怒し「悪魔」人種，色の褪せた白色人を創り出した。黒人から白色人を作るのには色の漂白段階が必要であるため，彼はポトモス島に産児制限法と結婚に関する法律を定め，彼が引きつれて行った59,999名の黒人の中から突然変異によって生じた茶色人を撰び出し，茶色人同志，或は黒人と茶色人とのみ結婚を許した。この法律は生れた子供が黒人であれば秘かに看護婦によって殺害する様に定めてあり，結果として茶色人のみが残存することになった。ヤコブ氏の死後も法律は残り，200年毎に茶色人は赤色人に赤色人は黄色人へと変り，最も下等な人種が生れ出したのは今から約6,000年前である。この白色人は金髪，青眼で蒼白の肌をし，素裸で這い廻り，木の上に住んでいた。600年後，この色褪せた下等人はポトモス島より本土にもどり，その奸計と悪知恵を働かして黒人に内部抗争を行わしめ，それに乗じて彼等を支配した。以来，6,000年の間，地上は白人支配の地と化し，平和は破られ，有色人の苦難の時代となった。アフリカに住んでいた黒人は白い悪魔に騙されてアメリカ大陸に連れて来られ，奴隷制下に苦しむことになったが，これは黒人に白い悪魔の正体を知らせるべくアラーの神が定められた黒人に対する聖なる試練の時期であった。アラーの神はこの間，偉大な

る賢者をアメリカに送る用意をされていていたが，その賢者が W. D. ファードである。彼は1930年にミシガン州デトロイト市に行商人として姿を現わし，エリジャ・モハメッドに神託を伝えて姿を消した。

参考文献

Malcom X, *I'm Talking to you Whiteman* (*The Saturday Evening Post*, Septmber 12, 1964) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism* pp. 148—149

このヤコブの歴史に選民思想と終末観が加味され，アメリカ黒人は有色人種を救済する使命をおびた選民であり，現在の白人の「罪深い」文明を破壊する任務を持っているというブラック・モズリムの教理が形成される。近代アメリカの黒いナショナリズム運動にはマーカス・ガァーヴェイ運動とモーア運動があるが，ブラック・モズリムはその起源をモーア運動の指導者，ノーブル・ドリュー・アリに持つといわれ，1929年アリの死によって W. D. ファードがこれを受け継ぎ，やがてエリジヤ・モハメッドによって今日のブラック・モズリムが形成されたとされる。

(6) E. U. Essien-Udom, op. cit., p. 27.